**説教20231126エゼキエル34：11-17マタイ25：31-46「主イエスの公平」**

**先週は、私たちが、この地上を歩んでいる期間に、主イエスに立ち帰り、罪を赦されて、最後の主の日に備えるという、準備の期間について、十人のおとめのたとえ話に聞きました。**

**今日は、その主の日を迎える直前に私たちが経なければならない、最後の審判の時のことが語られます。最後の審判と言うのは、私たちが毎週唱えています使徒信条の一節にある、「かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん」という一節で唱えられていることです。その様に、私たちは、主イエスから審判を受ける時を必ず迎えることになるのです。今日の聖書箇所では、最後の審判は、羊を右に、山羊を左に置く時であると、主イエスによって言われています。「羊を右に、山羊を左に」と言うのは、わかり易い喩えでありますが、洗礼を受け、まことの羊飼いであります主イエスを信じて、彼に従って行くことを約束したクリスチャンたちは、喜んで、私は羊です、と言い表すことが出来ます。**

**有名な詩編２３篇は、次の様に歌い始められます。**

**「主は私の羊飼い。私は乏しいことがない。」「主は私の羊飼い。私は乏しいことがない。」例えば、この短いフレーズを毎日毎日、最後の日まで喜び歌っている人は、間違いなく主に養われる羊として、最後の審判の日を迎えることが出来るでしょう。そして、そのような人を主イエスは決して山羊とみなすことはされず、羊として、御自身の右に置かれることでしょう。**

**主イエスは、最後の審判の時を、私たちを恐れさせるために設けられたのではなく、羊である私たちを救うために設けられました。それは、「主は私の羊飼い。私は乏しいことがない」と、いつも喜び歌って、主イエスに常に感謝し、主イエスを常に賛美する全ての人に公平に永遠の祝福を与え、用意されている神の国を公平に受け継がせるためなのです。**

**主イエスの右に招かれ、救われることの条件というのは、難しいことではありません。例えば、この地上で沢山の奉仕活動をしたとか、教会の礼拝に欠かさず出席したとか、沢山の人を教会へと導いて洗礼へと導いたということが、主イエスの右に招かれて救われることの条件では決してありません。もちろん、これらのことは、一つ一つが尊い御働きであることは間違いありませんが、私たちは、それらのことによって、自分をほめたたえていたのでは、どうしようもないのです。私たちは、むしろ、これらの御働きを覚える時、益々主イエスに向かって、主イエスをほめたたえる者たちとされるのです。**

**という訳で、私たちは、この地上での自分の功績をうんぬんする以前に、「主は私の羊飼い。私は乏しいことがない」といつも主イエスに感謝し、賛美を捧げることによって、既に救われているのです。どうか主イエスが、これらのことを、最後の審判の時まで、私たちに続けさせてくださいますように。**

**私たちは、最初から最後まで、主イエスに養われる者たちです。私たち、というこの群れを、主イエスは養い、憩わせるのです。この様に最初から最後まで私を養ってくれる方と言うのは、ただ主イエス以外にはありません。このことはこの世での、実の父母（ちちはは）と子どもとの関係とに較べてみれば明らかです。父や母は、子どもが幼い時は、子どもを養いますが、子どもが成人して独り立ちの時を迎えたら、最早、その子どもを養うことはありません。そして父や母が老人になった時は、その立場は入れ替わり、子どもがその父や母を養うことになるでしょう。**

**それに比べて、主イエスはまことの羊飼いとして、私たち人間一人ひとりを、羊として最後の最後の時まで養って下さるお方です。そのようなお方が憐み深く、慈しみ深く無い訳がないのです。主イエスは、羊である私たちが最後の最後まで、素直に養われるために自分の処に寄ってくることを喜ばれ、決して、こばまれることはないのです。主イエスは、殊に弱く小さい者たちの味方であります。主イエスは、失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くするお方であります。しかし、その弱い者たちを守るために、肥えたものや強いものに対しては、それらを滅ぼすほどに厳しい御方でもあります。**

**主イエスは、クリスマスに赤ちゃんという、この世で、父や母に養われないではおられない、弱くて小さい一人の人としてお生まれになりました。しかし、その時、主イエスの肉体のうちには、既に、全ての人を永遠に養うことが出来る、まことの神の、命の光が宿っていたので、その光に導かれて多くの人たちが、主イエスの御誕生の場所へと招かれたのでした。その光は、今ここにも光り輝いていて、私たちは今ここで主イエスによって養われているのです。**

**主イエスに養われる幼子のような私たちでありますけれども、その幼子としての心を忘れずに、聖書の御言葉に聞きましょう。**

**マタイによる福音書 25章 34節以下です。なお、ここで言われる王と言うのは主イエス御自身のことです。**

**そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』**

**すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』**

**そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』**

**この王と、正しい人たちとの応答は、主イエスと私たちの応答でもあります。しかし、主イエスはこの話を当時の現状に即して話されたので、今を生きる私たちとの間には自ずからギャップがあります。それはどういうことかと言いますと、主イエスがこの様に実例を一つ一つ挙げて申し述べられた事柄は、当時は、小さな事、取るに足りないことととして、誰もが、力むこともなく自然に行っていた隣人愛の具体例だったということです。つまり、当時は、それを行う心さえ持ち合わせていれば、隣りで飢えている、見知らぬ隣り人に食べ物を分け与える、などと言った隣人愛の行いは、誰にでも簡単に行うことが出来た社会状況にあったということです。**

**ある６０年前のイギリス人によって書かれた注解書には次の様に記されていました。**

**「イエスが推奨されたのは、空腹の人に食物を与え、かわいているひとに飲ませ、旅人をもてなし、病人を見舞い、獄にいる人をなぐさめるなど、誰にでも出来る簡単な事であった」と。**

**さて６０年経った、今の日本で、これらの行いは、果たして簡単なことと言えるでしょうか。現状では、これらのことは決して簡単なことではありませんし、むしろ難しいことであるとさえ言えるでしょう。**

**主イエスがこの時、具体的に述べられた隣人愛の行いの一つひとつは、今の私たちにとっては、実行するのにかなりハードルが高い事柄だと言えるでしょう。私たちは、今の社会にあっては、それこそ主イエスの御名を唱えながら、心を高く上げつつ頑張らない限り、隣りで飢えている見知らぬ隣り人に食べ物を分け与えるなどということは出来ない社会状況にあると思います。**

**しかし、聖書に書かれている隣人愛を実行する人たちの姿は、そんな風に頑張る姿ではなかったのでした。彼ら彼女らは、その時、自分たちの隣人愛を、意識されない程に自然に行動へと移すことが出来たのでした。**

**そう言う訳で、その正しい人たちは「主よ、いつわたしたちはそのようにしたのでしょうか」と言って、そのままの素直な思いを気負うことなく主イエスに返すことが出来たのでした。**

**私たちが、これらの正しい人の様に、最後の審判で、主イエスから思いがけず喜ばれて、素直に主イエスと心を通わすことが出来るには、私たちは一体、この地上で具体的にどのように隣人愛を行っていけばいのでしょうか。**

**この問いに対して、今日の聖書箇所は次の様に語ります。あなたが今、さりげなく行っていることの一つひとつは、主イエスによって見られていて、そして最後の審判の時迄、主イエスによって覚えられています。そして、あなたが、それまでに行ってきたことや、或いは行ってこなかったことの良し悪しは、最後の審判の時に、主イエスによって判断されるのですと。つまり私たちのこの地上での行いの良し悪しは、この地上にいる間には判断されないということなのです。**

**私たちは、この地上で、良いことをしようとしても、必ずしも良いことが出来るとは限りません。それゆえ、私たちは、全ての行いは主イエスに見られているということを常に忘れずに、慎重に行わねばならないということです。**

**私たちは、最後の最後まで主イエスに養われる、小さな者の一人ひとりであります。その小さな私たちに、主イエスは、御自身が十字架の上で流された血汐をお与えになって、私たちが、永遠の祝福のうちに生きることが出来る永遠の命をお与えになろうとされています。しかし、自分こそが隣り人を養っているのだなどといった、おごった心を持ってしまう時、私たちは主イエスから離されるでしょう。**

**今の世の中で、主イエスの御言葉を折に触れて隣り人達に語り伝えていくという、私たちに託された小さな奉仕の業を行っていくという事は、間違いなく、最後の審判の時に、主イエスから喜ばれ、主イエスの右に招かれる行いであることでしょう。**

**一見、隣人愛が冷え切っている様に見える、今の世の中で、自分自身が小さな者となって、主イエスに養われながら、主イエスに養われる喜びを語っていくという行いは、最終的に裏切られることは決してないのです。**

**時に、何の成果も出ないまま涙を流しながら、主イエスの福音を述べ伝えるような場面もありますが、私たちは、最後の審判の時に、主イエスに喜ばれるその主イエスの御顔を思い浮かべながら、又、伝道の業を、淡々と行って参りたいと願います。**

**天の父**

**父よ、あなたが最後まで、私たちを祝福のうちに養って下さることに感謝します。私たちは小さな者たちであり、小さな業しかすることが出来ません。しかし、そんな小さな業の一つひとつを、あなたは全てご覧になっています。見守って下さるあなたに、感謝と賛美を捧げます。どうかあなたの慈しみとまことを持って、私たちを最後まで導いて下さい。**

**どうか、聖霊によって私たちの内に宿って下さい。私たちの心を清め、私たちの体があなたの御心に適うように動くことが出来ますよう、私たちの心と体をあなたが支配して下さい。**